

ローソクだーせ、だーせーよ！

8月7日は、月遅れの七夕です。そしてこの日は、夜になると、三々五々子ども達が連れ立って、

ローソクだーせ、だーせーよ。

出さないとかっちょくぞ！

おーまーけにひっかくぞ！

と歌いながら家々を回ります。

「ローソクだーせ」といわれたからといって、本当にローソクを出してはいけません。昔は昔、今はお菓子を出すのが習わしです。

この「ローソク出せ」、一体いつ頃から始まったのでしょうか。安政2年（1855年）に蛸子七左衛門という方によって書かれた『函館風俗書』には、七夕の習わしとして、子ども達がめいめいにガク灯籠を差し出して、竹に五色の短冊を付けて、囃し立てながら歩く様子が描かれているそうですから、子ども達が家々を回って歩くというのは、随分と昔からあった行事のようです。

8月7日の七夕の日になると、子どもの頃、缶詰の空き缶を利用して「カンテラ」をつくり、それを持って友達と「ローソク出せ」をやった記憶が蘇ってきます。当時は、子ども達の数も多かったですから、とても賑やかで、遅くまで子ども達の声が途切れることはありませんでした。もっとも、もらえたのはお菓子ではなくローソクの方でしたが。

また、空を見上げれば天の川がくっきりと見えていたことを、今でも鮮やかに思い出します。

かつてお盆の頃になると、日本各地では、子ども達による万灯や灯籠流しが行われ、そのための材料や金銭を、子供たち自身が地域の家々を訪ねて貰い集めるという風習があったそうですが、そうした日本各地の伝統や風習が北海道

にも伝わり、「ローソク出せ」へと繋がってきたのかなと感じています。

「ローソク出せ」の日は、知らない家に行って「ローソクだーせ、だーせーよ」と大きな声を出しても叱られません。大きな子は小さな子の面倒を見ながら歩きますが、そんな時は随分と大人びて見えるものです。今年の「ローソク出せ」も終わりの時間が近づいた頃に、子ども達の一団が我が家を訪れました。

既に何組か来た後でしたので、家内が「もしかしたら全員に当たらないかも知れない」といったところ、その中の年長の女の子が「小さい子から上げてください」といったというので、感心していました。幸いにも、全員にお菓子を渡すことができほっとしていますが、こうした子ども達の行事は、単に夏の楽しい思い出づくりというだけではなく、子ども達がそれぞれに成長していく大切な場面でもあるのだということを、大人達は認識しておく必要があります。

また来年の8月7日の七夕には、お菓子を沢山用意して見知らぬ子ども達を待っていようと思います。そう、1年に1度の逢瀬を待ち焦がれている彦星のように……。(塾頭 吉田 洋一)